

# 宋代の『金光明経玄義』をめぐる論争

林 鳴 宇

## 一、『金光明経』の教学的諸課題

『金光明経』は、アジアで最も流行した大乘經典の一つである。そして、天台教学だけでなく、中国仏教や日本仏教にとつても非常に重要な教典である。中国天台の金光明懺法の流行、捨身供養思想の成立、中国民衆の四天王崇拜、日本の四天王寺の建立、最勝会の流行などは、『金光明経』の信仰に基づいていると考えられる。津田左右吉は曾て、『シナ仏教の研究』<sup>①</sup>の中で、『金光明経』について次のように説いた。

金光明経にはインドのものとのことばの本が伝はつてゐるので、この経について考へるには、それを主なる資料としなければならぬが、これは梵語を知らぬわたくしにはできないことであるから、ここではシナ語訳のものについていつたのである。シナやわが国においてこの経がどのような意味で行われたかを知るには、これでも、一おうは、ことがたりるであらう。なほシナでは、この経に説いてある懺悔のことが重んぜられたようであるが、わが国では、それよりも護国の功德の説いてあることに

こころがひかれたらしい。これは、仏教が官府によつて宣伝せられ、仏教の弘められたことに政治的意味が伴つてゐたためであらう。

確かに彼が述べた通り、『金光明経』の懺悔・護国の思想は後世に大きな影響を及ぼした。

『金光明経』には、漢訳のほか、三種のチベット語訳、カラムク語訳、蒙古語訳、満語訳なども存する。最初の漢訳は、北涼の玄始三年（四一四）以降に、中天竺沙門の曇無讖三蔵により『大般涅槃経』などの經典とともに訳出された『金光明経』四卷十八品である。この曇無讖訳から百余年後の承聖元年（五五二）<sup>②</sup>（一説には太清元年「五四七」）<sup>③</sup>、梁の真諦三蔵が、曇無讖訳に「三身分別品」、「業障滅品」、「陀羅尼最浄地品」、「依空満願品」を加えて『金光明帝王経』と名付け、同経の第二訳（七卷二十二品）を訳出した。その後、北周武帝の時（五六〇〜五七八）に、耶舎崛多及び同学の闍那崛多も、曇無讖訳をもとに「寿量品」及び「大弁天品」を増広し、『金光明更広寿量大弁陀羅尼経』五卷を訳出した。隋代に至ると、

開皇十七年（五九七）、北天竺沙門闍那崛多及び達磨笈多が梵本を参照し、まだ訳されていなかった「銀主陀羅尼品」、「囑累品」を補充し訳出した。同年、釈道安の弟子である大興善寺の宝貴は、それまで訳出された四本の経典を編修し、『合部金光明経』八卷二十四品を完成した。これらの諸本は旧訳と呼ばれている。

これに対し新訳は、唐代齊州の沙門、義浄が訳出したものであると言われている。義浄は、留学先のインドから将来した梵本『金光明経』によって、久視元年（七〇〇）から長安三年（七〇三）の間に、洛陽の福先寺及び長安の西明寺にて多くの訳経僧と共に、『金光明最勝王経』一部十巻を訳出したのである。これは、『合部金光明経』の二十四品に更に七品を加えただけでなく、各品の字句についても旧訳を潤色している。

天台大師智顛は、曇無讖訳『金光明経』について『金光明経玄義』、『金光明経文句』という註釈書を出しており、天台側はこの曇訳を大変重視していたと考えられる。宋代の遵式が編集した『天台教随函目録』では、曇無讖訳『金光明経』を「本経」、義浄訳を「新訳」と呼んでいる。また、遵式が『金光明天王護国道場儀』を整理する際も、曇無讖訳、智顛の『国清百録』、義浄訳の順序でそれぞれの重要度を表し、対照させて引用した。

曇無讖が訳した十八品の『金光明経』の内容を見ると、以下の四つの教理範疇に分けることができる。

「空の解釈」、六根、六識、四大、五蘊、十二因縁は皆な空なると説き、他の般若経典から強い影響を受けていたことが分かる。

「懺悔」、金光明懺悔の功用は、興した罪過を諸仏の前で告白することにより、それが改められるだけでなく、未来に生じ得る悪業をも防ぎ得ることにある。

「国家意識」、王・国・法は一体であると捉える。『金光明経』を護国経典と定位する重要な根拠である。

「放生捨身」、流水放生と捨身飼虎の二つの因縁物語を説く。『金光明経』は大乗菩薩の思想を伝え、自利利他の極意を闡揚したとする。

また『金光明経』も「諸経の王」と呼ばれ、経典の中で陀羅尼の諷誦によって国家が安泰になるとする点も、特色の一つである。

## 二、『金光明経玄義』の内容

隋代に至り、智顛は、開皇十四年（五九四）に、学士の曇捷などのために『金光明経』を講説した。また、『天台大師別伝』や『国清百録』によれば、智顛は天台山に居た時も『金光明経』を度々講説した。郡の漁民がこれに感化され、

漁業を相次でやめたと伝えられている。

その智顛が講述したものを、弟子の准頂が記録し整理したのが『金光明経玄義』及び『金光明经文句』であると考えられる。ただし、両書について、准頂の『智者大師別伝』、智顛の書状を収録する『国清百録』は言及していない。書名が文献上最初に表れたのは、最澄の『伝教大師将来台州録』である。その後、円珍の『入唐求法目録』にもこれを見ることができ、『金光明経玄義』の版本については、佐藤哲英が『天台大師の研究』の中で詳しく考察しているため、ここではその説明を省略し、『金光明経玄義』の内容を簡単に紹介するにとどめる。

「玄義」という文体は、天台独自の経題解釈法である。『金光明経玄義』も『法華玄義』と同じ体式である。即ち、「五重玄義」を以て、名（経名）、体（経の体質）、宗（経の宗旨）、用（経の働き）、教（経の位置づけ）の五つの立場から経題を解釈し、経の内容にまで当てはめ、その深意の簡略的な説明を目的とする。天台教団以外の諸師も経題を解釈するもの、智顛のような「五重玄義」という方式によるものはほとんど見られない。

『金光明経玄義』は、「総釈五章」及び「別釈五章」から構成される。「総釈」には「一生起」（五重玄義の生起する順序）、「二簡別」（五重玄義を料簡し分別する）の簡単な紹介が記され

ている。「別釈」には、「一釈名」、「二辨体」、「三明宗」、「四論用」、「五判教」の五重玄義の説明が含まれている。そのうち、「釈名章」が最も詳しく書かれているが、議論を招き得る点が存在する。

「釈名章」は、その目次によると、「一通別」、「二翻訳」、「三譬喩」、「四附文」、「五当体」の五節の釈しか提示していない。しかし実際に、その内容からすると、さらに「観心釈」及び「帝王釈」の両節も存在する。「通別釈」では、経名の「金光明」三字は他経と異なるとし、「経」の一字は他経と共通する箇所であるとした。「翻訳釈」では、真諦による「金光明帝王経」との題名翻訳が最も相応しいとし、本経は「金光明経」とするが、「帝王」の意も含まれると説明した。「譬喩釈」では、旧経師の金光明「一種三法」（三徳のみ）説を批判し、真諦の金光明「三種三法」（三法、三身、三徳の三種）説を取り上げて補充し、金光明「十種三徳」説を成立させた。この「譬喩釈」は、「標十数」、「釈十相」、「簡十法」の三つの項目を立て、十種三法の「順逆両番」の「順説」、即ち三徳、三宝、三涅槃、三身、三大乗、三菩提、三般若、三仏性、三識、三道の順序で「十種三法」を説明した。「附文釈」では、「金光明」の三字が単なる譬えではなく、『金光明経』の中にも随処に見られる仏が講説したものであると述べ、経題は経文の内容に従ったものであると説明した。「当体釈」で

は、天台の「当体」の概念を説いた。即ち、『金光明經』の讚仏品にある「如来之身、金色微妙」の偈文を取り上げ、「如来身」と「金色」は一見別のものであるが、如来身において両者は二つの概念にして同一のものであるとした。さらに「当体積」は一步進んで、「金光明」の三字は譬喩にとどまらず、仏法の性質をそのまま反映するものでもであると説明した。

問題は、これら五積に続く「観心積」及び「帝王積」と見られる両積である。この両節の内容の解釈について、宋初天台には大きな分岐が生じた。ここでは、『金光明經玄義』の現行本（広本）における「観心積」及び「帝王積」の内容を紹介する。まず、「観心積」は第三番目の「譬喩積」の続きであると思われる。「譬喩積」が十種三法「順逆両番」の「順説」を説いたのに対し、「観心積」では十種三法「順逆両番」の「逆説」、即ち三道、三識、三仏性、三般若、三菩提、三大乗、三身、三涅槃、三宝、三徳の順で、観心積に基づき十種三法の「金光明」を説明した。次に、「帝王積」については、『金光明經玄義』の第二「翻訳積」で真諦による「金光明帝王經」との題名を推賞した。「帝王」という概念は『金光明經玄義』が極めて重視するものであり、当然、この一節を設ける必要があった。そして、『金光明經玄義』は帝・慧・王の三義を以て、「十種三法」に対応させて説明を

し、この「帝王積」は、「翻訳積」を補充的に説明したものと考えられる。

「別積五章」の第二章は、「辨体章」である。その内の「積名」節では、法身、法性が『金光明經』の体質であると、また体には「礼」（礼の義を知れば、如来が説いた本經の体が貴極であることが分かる）、「底」（底の義を知れば、本經の法性甚深の意が分かる）、「達」（達の意を知れば、本經の体が自在無礙であることが分かる）の三義が存するとした。「引証」節では、『金光明經』の經文を引用し、法性が經の体質であると証明した。「料簡」節では、曇無讖訳と真諦訳との比較によって、法性は「空」あるいは「非空」という定義を以て解釈するものではなく、法性は經の体質である点を改めて強調した。

「別積五章」の第三章は、「明宗章」である。『玄義』は三種の旧説、すなわち仏因を宗要、仏果を宗要、仏因仏果を俱に宗要とする三説を取り上げ、仏果を宗要とする説に同調した。即ち仏はよく鹿や馬の形に変化するが、鹿や馬が必ず仏身であるとは限らない。法性が常・無常（長短）の概念を有するからと言って、常・無常（長短）の概念が必ず法性であるとは限らない。従って、果によって体を表すところこそが重要であると『金光明經玄義』は説いた。

「明宗章」の続きは、「論用章」（明用章ともよぶ）である。「懺悔品」が主に破悪、「讚歎品」が主に生善であるのに対し、

「空品」は、「破悪生善」を導成するために設けられたものであるとした。つまり、經文に従い、本經の働きを「破悪生善」としたのである。

「判教章」は、「別釈五章」の末章である。真諦の本經を「法華之後涅槃之前九十日説」と判断したのに対し、『玄義』は本經を方等時の所屬であるとし、化法四教においては通教の所屬であるとした。

### 三、唐、五代の『金光明經』研究及び流布状況

隋唐代では、『国清百録』の「智者遺書與臨海鎮將解拔國述放生池 第一百四」(智者は遺書を臨海鎮將の解拔國にあたえ放生池をのぶ<sup>9</sup>)に以下の記載がある。

故臨海内史計尚兒敬法心重。仍請講説金光明經。至流水品。檀越羊公賀等聞斯妙句。咸捨滬業。凡五十五所。遂使水陸沾濡人蟲荷澤<sup>10</sup>。

亡くなった臨海内史の計尚兒、法をうやまう心がおもく、智者大師に『金光明經』の講説をお願いした。流水品まで説き終わり、檀越の羊公賀などは、その妙句を聞き、ことごとく漁業をやめた。あわせて五十五ヶ所に及ぶ。衆生はこの恩恵を受けた。これは、智顛が自ら『金光明經』を講説した証拠である。その場で門下たちが聴記した場面をも想像することができ

宋代の『金光明經玄義』をめぐる論争(林)

後に、天台側の灌頂は智顛の『金光明經』の講義を整理し、『金光明經玄義』及び『金光明經文句』を結集した。宋の士衡が編集した『天台九祖伝』の記載によれば、灌頂は『金光明經玄義』及び『金光明經文句』を編集した他、『金光明經』の講説も積極的に行った。同時に、吉蔵撰述と見られる『金光明經疏』も世に現れていた。

湛然(七一―七八二)は、灌頂以降に停滞した天台教学を復興させたことで、唐代天台の中興の祖とも呼ばれた。彼は、智顛の天台三大部には注釈を付けたが、智顛が講述した『金光明經玄義』及び『金光明經文句』には、注釈書を付けなかつた。ただし、湛然の著述の中には、『金光明經玄義』及び『金光明經文句』の引用が見られる。

『止観』にある「三法」の説明について、『止観』が三法を「三菩提、三仏性、三宝」などと簡略して説いたのに対し、湛然は『輔行伝弘決』の「釈名章」に次のように説いた。

今依金光明觀音玄淨名疏等。並以十三例釋三徳。言十三者。頌曰。道識性般若。菩提大乘身。涅槃三寶徳。一一皆三法。

ここで湛然は智顛が『金光明經玄義』などで樹立した「十種三法」の概念を以て補充した。無論、智顛は『法華玄義』の迹門十妙でも「十種三法」を説いてはいたが、それは『金光明經玄義』ほど詳しくない。湛然が、最も完備された『金光明經玄義』の説を用いて『止観』の「三法」を説明したこ

とは当然である。

また「陳露」の意について、『輔行伝弘決』は『金光明経文句』が説いた「懺悔」の解説を用いた。

陳露者。陳列也首也。悔者伏也。金光明疏釋懺悔品。彼廣釋名云。懺名白法。悔名黒法。白法須尚黒法須捨。又懺名改往悔曰修來。又懺名披陳悔名斷續。

『金光明経文句』は、金光明懺悔の功用を、過去に興した罪過が諸仏の前で告白することにより改められるだけでなく、未来に生じ得る悪業をも防ぐようにとの一種の大誓願も含むものであると明確に定義している。『止観』の説明より詳しいため、湛然はそれを引用し補充的に説明した可能性が大きい。

唐代では、中国と日本との仏教思想の交流が頻繁に行われた。日本の最澄（七六六～八三三）は入唐して、台州竜興寺の極楽浄土院において、天台教学に関する十条の疑問を道邃（？～七六六～八〇五）に呈上し、道邃はこれに答えた。問答の内容は、最澄と義真らによって貞元二年（八〇五）二月二十九日に『天台宗未決』として整理された。これは、最初の「唐決」である。その後、道邃の法を承けた広修（七七～八四三）も日本側の疑問に対し、「唐決」を出した。円仁らと共に入唐した円載は、承和五年（八三八）に、比叡山の円澄座主が作った天台教学に関する三〇条の疑問を天台山禅林

寺の広修に献上した。そして、開成五年（八四〇）に、広修から解答を得たのである。

この「円澄問、広修答」の「唐決」の中で、第一九問の「六即」の意について、三蔵・通・別の三教の修行階位（六即）はそれぞれの經典で証明している。しかし、円教の修行階位（六即）についての説明は、明確には見られない。そこで一体、どの經典の中にそのような説明があるかと、円澄は質問した。それに対し、広修は『摩訶止観』などを引用して説明したほか、『金光明経玄義』の「当体釈」にある智顛の「俗本無名、随真立名」の解釈を取り上げ、円教の修行階位（六即）は三蔵・通・別の三教の修行階位（六即）と同様にそれぞれの經典を以て証明することができるかと断言した。

以上、湛然より以降、『金光明経玄義』及び『金光明経文句』両疏が天台教団の中で流行していたことが分かる。

九〇七年から九五九年までの五三年間の後梁・後唐・後晋・後漢・後周の五朝代の歴史は、唐宋二大王朝の間に存在する転換期の歴史と言うことができる。即ち、唐玄宗時代の安祿山・史思明の乱（七五五～七六三）、唐武宗時代の会昌廢仏（八四五）、唐末の黄巢の乱（八七五～八八四）などの戦乱を経て五代に入った後、五代の各王朝も朝廷の交代が絶えず、仏教の流れは都市から地方へ、貴族・士大夫階級から庶民へと向かった。そして、五代の最後の王朝となる後周の世宗の

時代は、腐敗した仏教教団を儒教の倫理観で徹底的に改造した事件（いわゆる「三武一宗」法難の最後である後周世宗の廃仏）が生じたことで、仏教の発展は一層停滞したのである。

五代では、『金光明経』研究に関する資料は極めて少なく、現存の僧伝によれば、わずか三人の伝記に『金光明経』が研究されていたことが記されているだけである。

靈光皓端（八九〇～九六一）<sup>16</sup>は九歳で靈光寺にて出家し、南山律と法華経を勉強、両浙地方で説法し、呉越錢王に大変重んじられた。後に彼は、当時天台の第十祖と呼ばれた玄燭につき、一心三觀の法門を学び、律学と天台の知識に基づき『金光明経随文釈』十卷を著した。

慈光晤恩（九二二～九八六）<sup>17</sup>は二十歳の頃（後唐の長興年間）に沙弥戒を受け、崑山の慧聚寺にて南山律を勉強した。二五歳から三十歳の間に皓端と出会い、様々な経論の聴習も行った。晤恩はこの間に天台の三觀六即の教えに興味を示し、三三歳から三五歳の間に志因の門下となり、七五歳までのおよそ四十年間慈光寺にて活躍し、三大部、金光明経、金錚論などの科文を著し、『金光明経玄義發揮記』も出した。晤恩はその中で、略本『金光明経玄義』こそが智者大師の真撰であり、広本『金光明経玄義』の觀心釈などは後人の添加であるとした。これをめぐっては、後に大論争となった。

螺溪義寂（九一九～九八七）は幼年の時に、出家を願って、

宋代の『金光明経玄義』をめぐる論争（林）

開元寺に入り、わずか数か月間で法華経を勉強し終えた。具足戒を受けた後、会稽に行つて南山律宗を勉強した。その後、天台の清竦のもとで天台教觀も学んだ。そして、義寂は呉越王の援助を受け、海外から天台散逸書の再輸入を始めた。義寂は在世の時、『法華経』、『維摩経』、『金光明経』などを講義した。『螺溪振祖集』<sup>18</sup>によれば、太平興国二年（九七七）、呉越王は義寂を招き、『金光明経』の講説を頼んだ。そして、そのために三万名の僧侶に食事を施し、義寂に様々な仏具を与えた。

以上から、『金光明経』やその注釈書の研究、講説は宋代以前から行われていたことが分かる。後に四明知礼の時代に生じた『金光明経玄義』の解釈に関する激しい論争も、必然であったと言えることができる。

#### 四、宋初における『金光明経玄義』広略二本に関する問題

前述したように宋の始めに、慈光晤恩が『金光明経玄義發揮記』を著し、略本『金光明経玄義』こそ智者大師の真撰であり、広本『金光明経玄義』の觀心釈、帝王釈は後人が添加したものであると説いた。

『仏祖統紀』<sup>19</sup>によれば、五代の戦乱後、数多くの天台經典が散逸した。呉越王の錢俶は高麗や日本に使者を派遣し、天台典籍を求めさせた。高麗国の沙門諦觀は論疏を以て、螺溪

義寂法師に出会い義寂の弟子となり、天台典籍はこうして中国に返された。義寂は義通に法を伝え、義通は知礼に法を伝授した。知礼は法を大いに講説し、天台教觀を盛んにした。

これらの記載の真偽は別として、唐末の会昌の破仏と五代の戦乱により、教学研究に必要な天台典籍の一部が失われたことは事実である。そして、五代末から宋初にかけて、天台学派の諸師は、唐末五代の戦乱で散逸した仏教書の蒐集や考証に精力を尽くした。それと同時に、『金光明經玄義』広略二本の真偽についての問題が表面化したのである。

現在、流布している『金光明經玄義』は、四明知礼が一生をかけて守ってきた『広本』である。しかし、広本の『金光明經玄義』は本物であろうか。知礼が広本の真実性を説いたことだけを根拠に、我々もそれに従っても良いのであろうか。

まず、四明知礼の『釈難扶宗記』によれば、確かに宋初には、広本及び略本の二本の『金光明經玄義』が実在した。しかし、宋代以前の『金光明經玄義』を現行本と比較しない限り、広本略本の真偽を判断することは難しい。ただし、宋代以前の『金光明經玄義』はどこにも保存されていないため、これらの問題を解決することは非常に困難である。ここで、本論文はあえてこの問題を検証したい。

1、『金光明玄義』の科文および内容から検討した広本の妥当性

広本『金光明經玄義』の初めには

將釋此經大分爲二。初釋題。二釋文。釋題爲五。一釋名。二辨體。三明宗。四論用。五教相。就此五章大分爲二。初總釋。二別釋。總釋又二。初生起。二簡別。(中略)二別釋者。別釋五章也。今先解釋名章。(中略)今釋名爲五。一通別。二翻譯。三譬喩。四附文釋。五當體釋。<sup>20)</sup>

一積名。二辨體。三明宗。四論用。五教相、この五つの項目は天台智顛の独自の教典解釈法であり、一般的には五重玄義と呼ばれている。また「一積名」(經名の解釈)の中には、さらに五種類の解釈方法、通別積(經名の同(通名)・異(別目)をめぐる解釈)、翻譯積(翻譯した題名の解釈)、譬喩積(題名を含む譬喩の解釈)、附文積(本經の文に従って題名を解釈する)、当体積(經題の譬喩積を超え、經題そのままが法性真実であるという解釈)が含まれる。

広本には、「別積五章」の「一積名」の中に、上記の五積のほか、「觀心積」と「帝王積」と思われるものが含まれている。慶昭、智円など「山外」と言われた諸師は、悟恩の説を継承し、「觀心積」及び「帝王積」の両積が後人の偽作であるとしていた。

一見すると、「両積」の存在は天台の科文提唱と異なるが、



広本『金光明経玄義』の文意を探究すれば、智顛の意に反していないことが分かる。三番目の譬喩釈の中では、「金光明十種三法」の説明について、「此之十法該括始終。今作逆順兩番生起」と説き、逆順の二種を説明するとしているが、「譬喩」章の中では、「十種三法の順説」（三徳、三宝、三涅槃、三身、三大乗、三菩提、三般若、三仏性、三識、三道の順序で「十種三法」を説明する）の説明しか見られない。即ち、「十種三法の逆説」はこの「譬喩」章の中に存在しないのである。では、「次門」及び「十種三法の逆説」はどこにあるのであろうか。広本の文意に従えば、それは「観心釈」の中にある。

次観心釋名者：上約十種三法論金光明。今：是為三道辯金光明  
…次観心明三識論金光明…次観心明三佛性金光明…次観心三般若金光明…次観心三菩提金光明…次観心三大乗金光明…次観心三身金光明…次観心三涅槃金光明…次観心三寶金光明…次観心三徳金光明…<sup>(22)</sup>

「譬喩釈」の「順説」を承けて、観心釈を以て十種三法を説明し、「譬喩釈」の内容に続けて、「十種三法の逆説」をしたのである。従って、この「観心釈」の内容を譬喩章の一部であると考えることができる。

また、「帝王釈」について、『金光明経玄義』の初めでは、今先解釋名章。若依四卷題但作三字。無帝王兩字。若依經文有

宋代の『金光明経玄義』をめぐる論争（林）

經王之義。若説若不説俱亦無妨。  
と、「釈名章」における「帝王」兩字に対する解釈の目的を示していた。

講説者の智顛は、題名が「金光明」あるいは「金光明帝王」であっても解釈することはできるが、文で表現するか否かは全体の解釈にとって問題ではないと説いた。

智顛は『金光明経玄義』を講説する際、帝王釈を一種の補充的な説明であるとし、それを後の記録者である灌頂が、『金光明経玄義』の中に忠実に入れたと考えられる。また、『金光明経玄義』の「翻訳釈」でも真諦が訳した「金光明帝王経」の題名が最も適切であるとしたことがあり、「帝王」という概念は『玄義』が極めて重視したものであるため、「広本」の「帝王釈」が無意味な釈であるとは言えない。

従って、「広本」が説いた「観心」、「帝王」兩釈の内容は本文の科文には見られないものの、他の章節と一致する箇所があり、内容からは後人の偽撰であると断定することはできない。

## 2、諸資料から見た広本の妥当性

『伝教大師将来台州録』の中に、次のような記載がある、

金光明経玄義一卷智者大師出二十六紙。金光明経疏三卷智者大師出八十九紙<sup>(23)</sup>

この記載から、最澄が日本に将来した『金光明經玄義』の一卷は二六紙、『金光明經文句』と見られる『金光明經疏』三巻は八九紙であることが分かる。また、唐代の『金光明經玄義』の分量を推測することができる。

計算をすると、最澄が将来した兩疏の紙数の比例値は2689 $\parallel$ 0.29である。さらに、現在の『大正新修大藏經』第三九巻が収録した『金光明經玄義』及び『金光明經文句』の分量<sup>24</sup>比例値は、3410 $\parallel$ 0.30である。

また、「山外派」が主張する觀心釈、帝王釈を除く略本『金光明經玄義』の分量<sup>25</sup>を以て『金光明經文句』と比例してみれば、23110 $\parallel$ 0.20という結果が得られる。客觀的条件が一致すると假定する場合、宋代の広本は略本よりも最澄の將來本に近いと考えられる。

筆者は、広本の説明に見られる前後の一貫性、及び最澄の將來した章疏の枚数の比例値をもとに、広本『金光明經玄義』は智者大師のものであると考える。

#### 五、宋代天台における『金光明經玄義』論争の位置づけ

智顛は『金光明經』に対し、經題を解釈する『金光明經玄義』と經文内容を解説する『金光明經文句』を著した。『金光明經玄義』の解釈をめぐる論争は宋代に起きた最初の論争であり、宋代天台における『金光明經』教学の論争史の主な

課題でもある。

知礼の時代(前山家山外時代)における天台内部諸師の思想対立はおおよそ以下の七つに分けることができる。

- A、『金光明經玄義』広略問題をめぐる論争(一〇〇〇～一〇〇七)
- B、知礼の『十不二門指要鈔』別理随縁問題をめぐる論争(二〇〇七以降)
- C、知礼の『觀經融心解』三輩文意問題をめぐる論争(一〇一四以降)
- D、智円の『闡義鈔』理毒性惡問題をめぐる論争(二〇一七)
- E、知礼の『妙宗鈔』色心雙具問題をめぐる論争(二〇二二)
- F、知礼の『妙宗鈔』仏身問題をめぐる論争(二〇二七)
- G、『金光明經玄義』の觀心釈偽撰問題をめぐる論争(二〇二二～二〇二八)

これらはすべて天台教学内部の論争である。そのほか、知礼は二人の禅僧と論争したこともある。一番長かったのは、『金光明經玄義』をめぐる論争である。『金光明經玄義』をめぐって知礼は、論争を始めてから亡くなるまで一貫して山外諸師と対立してきた。そして知礼は、妄心觀、性具三千などの諸説を取り上げ、唐末五代の停滞していた天台教学を興隆

したのである。

後山家山外時代の前期に至り、一部の人が知礼説を祖述するだけでは天台教学の新たな発展は望めないときれ、『金光明經玄義』の知礼釈について、徹底的な再点検が行われた。その代表となる人物が、従義や如湛などである。

一方、天台の守旧派は、『金光明經玄義』の新釈に対して、ただ知礼の説を繰り返すばかりであり、全面的な反論ができなかった。このように、後山家山外時代の前期は知礼教学に対する論議が活発であった時期と言える。

これに対して、後山家山外時代の後期は、知礼教学の復興期である。筆者は、宗暁の『四明尊者教行録』の出現（二二〇二年、知礼の滅後一七五年）をその頂点であると考え。衰退した天台教学を復興すると同時に、知礼時代の『金光明經玄義』をめぐる諸問題は再び取り上げられた。この点、従来では、四十年完結説、七十年完結説などの『金光明經玄義』論争の数十年完結論があるが、筆者は、宋代二百数十年間に亘って宋代天台諸師により頻繁に取り上げられていた課題であると考える。

従って、本論文では、四時期（前山家山外時期、後山家山外前期、後山家山外中期、後山家山外後期）の天台諸師の『金光明經玄義』をめぐる論争の問題点を、以下の五段階に分けて説明する。（以下斜体で引用した書名は散逸本である）

宋代の『金光明經玄義』をめぐる論争（林）

#### A、準備段階

主な論争点は、慈光悟恩が『光明玄發揮記』の中で広本『金光明經玄義』を非難したことである。この段階の主な論著は、以下の通りである。

- a、宝雲義通の『光明玄贊釈』
- b、広教澄或の『光明玄金鼓記』
- c、慈光悟恩の『光明玄發揮記』

#### B、第一段階（前山家山外時期）

主な論争点は、慈光悟恩の弟子である奉先源清と靈光洪敏の質問及び四明知礼の返答である。この段階の主な論著は以下の通りである。

- a、靈光洪敏の『光明玄義記』<sup>26</sup>
- b、奉先源清・靈光洪敏の『難詞』（『釈難扶宗記』が抜粋した山外派の問難。）
- c、四明知礼の『釈難扶宗記』（二〇〇〇年成立）
- d、慶昭・智円の『辨訛書』
- e、知礼の『問疑書』
- f、慶昭・智円の『答疑書』
- g、知礼の『詰難書』
- h、慶昭・智円の『五義書』
- i、知礼の第二『問疑書』と『覆問書』
- j、慶昭・智円の『釈問書』

宋代の『金光明經玄義』をめぐる論争（林）

四四〇

k、知礼の『四明十義書』（二〇〇六年成立）

l、慶昭の『答十義書』（二〇〇七年成立）

m、知礼の『観心二百問』（二〇〇七年成立）

### C、第二段階（前山家山外時期及び後山家山外の前期）

この段階に至ると、主な論争は、知礼周辺の人々による『金光明經玄義』に対する問題へと移った。しかし、なお目をひくのは、智円と知礼との論争である。対立前期の論争が終わった後十余年を経て、智円は一〇一八年に『光明玄表微記』を作り、再び広本『金光明經玄義』の「観心釈」と「帝王釈」を否定し激しく批判した。それに対し、知礼は『光明玄統遺記』（光明玄拾遺記）で反論した。智円のほかに、知礼側の遵式、仁岳、崇矩なども『金光明經玄義』の「当体章」または「題名解釈」について議論を始めた。この段階の主な論著や論点は以下の通りである。

a、慈雲遵式『金光明經王章』<sup>(27)</sup>

b、慈雲遵式、四明知礼の『光明玄当体章問答偈』<sup>(28)</sup>

○一五年以降の成立

c、孤山智円の『光明玄表微記』<sup>(29)</sup>（二〇一八年成立）

d、広智尚賢の『光明玄闡幽志』<sup>(30)</sup>

e、四明知礼の『光明玄統遺記』<sup>(31)</sup>（光明玄拾遺記）（二〇二三年成立）

三年成立

f、仁岳の『義編』（『義学雜編』）知礼の七種二諦を以て

『金光明經』題名を釈することに非難<sup>(32)</sup>。

g、「光明經王」の命題について、知礼弟子の崇矩も異見を出した。<sup>(33)</sup>

### D、第三段階（後山家山外の中期）

広智尚賢の弟子扶宗繼忠は、『十義書』、『雪謗書』、『解謗書』など山家山外論争の資料を蒐集し、自由な学風を提唱して、知礼教学を再評価する環境を作り出した。宋代天台の異端と言われる繼忠の弟子従義も、このような環境の中から生み出された。

『金光明經玄義』の解釈をめぐることは、従義は独自の立場を執り、悪意の批判ではなく、褒貶両面から客観的に知礼の解釈を評論した。前山外諸師の論に対し、従義はほぼ知礼と同様の立場で対決した。従義の知礼批判には、『仏祖統紀』のような単純な教祖批判ではなく、曖昧な公式説を徹底的に超えたいとの姿勢が見られる。『金光明經玄義』の注釈書の他、従義は『金光明經文句』の注釈書も出した。このことから、知礼と対決する姿勢を窺うことができる。このように、多くの著述を残した従義の教学は、宋代天台を研究するに無視できない存在である。なお、この段階の主な論著は、以下の通りである。

a、神智従義の『光明玄順正記』、『光明文句新記』

b、仮名如湛の『光明玄護国記』<sup>(34)</sup>

#### E、第四段階 (後山家山外の後期)

後山家山外時代の後期は知礼教学が復興した時代である。浄土・禅宗が一方的に発展し続けたのに対し、天台教家の諸師は衰退した天台教学の復興運動を展開した。知礼の時代における『金光明経玄義』をめぐる諸問題は、課題として再び取り上げられた。主な論著と論点は以下の通りである。

- a、石芝宗暁の『金光明経照解』
- b、柏庭善月の「論金光明題旨」<sup>35</sup>
- c、太虚普容の「光明定題」<sup>36</sup>、「評経王説」<sup>37</sup>など
- d、頑空智覚の弟子と見られる人物の著した「論諸部経王」<sup>38</sup>、「論光明経王」<sup>39</sup>、「論光明立題」<sup>40</sup>、「首衆南湖講光明玄題」<sup>41</sup>など

#### 結

宋代天台教学論争は、『金光明経』、『法華経』、『観無量寿経』の教理解釈の異同により生じたものであると考えられる。三経をめぐる「実相」の教学基盤をもとに「性具」、「性体」などの論が、「縁起」の教学基盤をもとに「円理随縁」、「別理随縁」などの論が、さらにその他諸々の小論が展開された。三経の教理解釈の異同によって生じた論争はそれぞれ独立したものでなく、互いに関連性を有するものである。ただし、内容が多岐であるため、本論文ではそのうち『金光明

宋代の『金光明経玄義』をめぐる論争(林)

経玄義』に関係する論争のみを取り上げて簡単に論じた。山家山外論争の初めは『金光明経玄義』をめぐる論争でもあるため、その『金光明経』の解釈理解、特に知礼の『釈難扶宗記』、『四明十義書』、『観心二百問』、『金光明経玄義拾遺記』、『金光明経文句記』、従義の『金光明経玄義順正記』、『金光明経文句新記』などを生んだ諸々の論議は、宋代天台の論争史の重要な一面である。これらの論争の内容やその関連性については、今後の課題にしたい。

#### 【注記】

- (1) 『シナ仏教の研究』頁二六八〜頁二六九(津田左右吉全集第一九卷 岩波書店 昭和四〇年)。
- (2) 『歴代三宝紀』大正蔵四九卷九八下。
- (3) 宋・宗暁『金光明経照解』(続蔵三一冊三六八左上)。
- (4) 『続古今訳経凶紀』(大正蔵五五卷二七〇上)、『開元釈教録』卷九(大正蔵五五卷五六八中)。
- (5) スタイン本『金光明最勝王経』卷八残簡(S.0523)、ペリオ本『義浄訳経題記』(P.2585)を参照。
- (6) 続蔵一〇一冊一三三三右下。
- (7) 大正蔵五五卷一〇五六中。
- (8) 大正蔵五五卷一〇九九上。
- (9) 池田魯参『国清百録の研究』頁五五〇(大蔵出版・一九八二)。
- (10) 大正蔵四六卷八二二中。

- (11) 大正蔵五一卷一〇一下、「安南嶺地曰安洲。碧樹清溪。泉流伏瀾。人徑不通。師留連愛翫。顧而誓曰。若使斯地夷坦。当来此講經。曾未浹旬。白沙通涌。平如玉鏡。師以感通相顯。不違前願。仍講法華金光明一部。用酬靈意。」とある。
- (12) 大正蔵四六卷二二中。
- (13) 大正蔵四六卷二二一中。
- (14) 大正蔵四六卷二八二下。
- (15) 大正蔵二九卷五九上、「又懺名白法悔名黑法。黑法須悔而勿作。白法須企而尚之。取捨合論故言懺悔。又懺名修來悔名改往。往日所作惡不善法鄙而惡之。故名爲悔。往日所棄一切善法今日已去誓願勤修故名爲懺。棄往求來故名懺悔。又懺名披陳衆失發露過咎不敢隱諱。悔名斷相續心厭悔捨離。能作所作合棄故言懺悔。又懺者名慚。悔者名愧。慚則慚天愧則愧人。人見其顯天見其冥。冥細顯麤。麤細皆惡故言懺悔。又人是賢人天是聖人。不逮賢聖之流。是故懺悔。」と詳しく書かれている。
- (16) 『宋高僧伝』大正蔵五〇卷七五〇下〜七五一上。
- (17) 大正蔵五〇卷七五二下。
- (18) 大正蔵四六卷九二五中。
- (19) 大正蔵四九卷三九四下。
- (20) 大正蔵三九卷一上。
- (21) 大正蔵三九卷二下。
- (22) 大正蔵三九卷六下〜九下。
- (23) 大正蔵五五卷一〇五六下。
- (24) 大正蔵が収録した『金光明經玄義』の分量は約三十四段、『金光明經文句』の分量は約一百十段である。
- (25) 觀心釈と帝王釈と除けば、略本『金光明經玄義』の分量は現行本の『金光明經玄義』の三分の二になり、大正蔵の分量から言えば、約二十三段前後となったのである。
- (26) 『仏祖統紀』山家教典志より(大正蔵四九卷二五九中)。
- (27) 続蔵一〇一卷二八右下『金園集』より、続蔵一〇一卷三二二右上『台宗精英集』卷四より。
- (28) 大正蔵四六卷九一九下。
- (29) 大正蔵四九卷二〇五下『仏祖統紀』智円伝。
- (30) 大正蔵四九卷二六〇上『仏祖統紀』山家教典志。
- (31) 大正蔵四六卷八三一上『十義書序』。
- (32) 続蔵経三一卷二八三右下『金光明經照解』卷上。
- (33) 続蔵一〇一卷三二八左上『台宗教觀撮要』卷三。
- (34) 大正蔵四九卷二九上『仏祖統紀』如湛伝、頁二六〇上『仏祖統紀』山家教典志。
- (35) 続蔵一〇一卷二六六右上『山家餘緒集』。
- (36) 続蔵一〇一卷三二一左下『台宗精英集』卷四。
- (37) 続蔵一〇一卷三二三右下『台宗精英集』卷四。
- (38) 続蔵一〇一卷三二八右下『台宗教觀撮要』卷三。
- (39) 続蔵一〇一卷三二八左上『台宗教觀撮要』卷三。
- (40) 続蔵一〇一卷三三六左上『台宗教觀撮要』卷四。
- (41) 続蔵一〇一卷三四一左上『台宗教觀撮要』卷四。